



囚われた人妻捜査官

聖実

肛虐魔薬調教

筑摩十幸

挿絵 / asagiri

立ち読み版



Contents

目次

第一章	悪魔たちの罠	4
第二章	狂宴の始まり	29
第三章	蝕まれる媚肛	78
第四章	悪徳が呼ぶ愉悦	132
第五章	墮落の烙印	174
第六章	極彩色の淫獄	227



登場人物

Characters

剣崎 聖実

(けんざき きよみ)

“牝豹”の異名を持つ特捜部の敏腕麻薬捜査官。クールで正義感の強い美女。

日向 虎夫

(ひゅうが とらお)

国内最大規模のヤクザ組織、日向組の組長。

阿川

(あがわ)

日向組の若頭である理論派のヤクザ。29歳。

神田

(かんだ)

聖実の上司で麻薬特捜部の部長。かつては彼女の父の同僚でもあった。

剣崎 昭

(けんざき しょう)

聖実の一人息子。元気な少年。

第二章 狂宴の始まり

「劍崎先輩、起きてください」

「うう……」

ポンポンと頬を叩かれて意識を取り戻す聖実。

「……こずえ……」

両手両脚に革の拘束具が嵌められ、それぞれに頑丈そうな鉄鎖が繋がっている。

「ここは日向組のアジトの一つ。先輩が探していたエンジェルフォールの製造工場ですよ」

からかうように妖しく微笑む後輩捜査官。無機質なコンクリート打ちっぱなしの地下室に不似合いな真っ赤なボンデージビスチェを身に纏い、手には乗馬鞭まで握られている。まるでSMクラブに出てくる女王様のようなのだ。

「工場ですって？」

しかし辺りにそれらしい設備は見当たらず、薬品の匂いもしない。まるで狐につままれたような心境だ。

「せっかく招待したのですから、エンジェルフォールの秘密を教えてくださいますよ、捜

查官殿。ククク、少しずつ……その身体にね」

そこへ阿川がやってきて、こずえの身体をそつと抱いた。伸びる手は自然と腰を抱き寄せ、女の肌触りを堪能している。

「さあ、こずえ。剣崎聖実を調教するのです。そして君と同じ淫らな牝奴隷に造り替えるんですよ」

「ああん……先輩を……奴隷に……はあはあ……私と同じに……」

甘くしなだれ、潤んだ瞳が恭順の意思を示す。そこには薬物だけでは説明のつかない、強い絆のようなものすら感じられる。

(こずえ……一体どうしてしまったの……?)

明るく朗らかで子犬のような愛らしさがあつたこずえが、今やヤクザの手先となり、毒婦のような色香を振りまいている……とても信じられない状態だった。

(これも薬の……エンジェルフォールのせいなの……?)

薬物で人の心を惑わせるといふのはよく聞く話だが、そこまで強い依存状態なら、もつと精神的にも肉体的にも異常、変異が見られるはずだ。だが今のこずえにそういった影響は見られない。可憐で愛らしい外見はそのままに、中身だけ淫婦に入れ替わってしまったような感じだ。

「わかりました。ウフフ、覚悟してくださいね、先輩。苦しいのは最初だけ、すぐに

気持ちよくなりますからね」

壁にあるハンドルのようなモノを回転させる。すると、ガラガラと音がして聖実の手脚に繋がれた鎖が巻き取られていく。

「何を……ああつ！」

両脚の鎖は天井に、両手の鎖は床に向かって引き込まれ、聖実の下半身が徐々に浮き上がり始めた。

「ううっ……やめなさい……機械を……止めなさいっ……くう」

やがて腰が吊り上げられ、背中も床から離れてしまう。そしてついには空中でX字の逆さ吊りにされてしまった。

「まあ、先輩つらとつても綺麗ですよ」

「ふ、ふんっ。何をしてくれるのか楽しみね」

絶体絶命のピンチにも不敵な笑みを浮かべる。とは言え状況は最悪だ。

ピンと伸びきった手脚は日本人離れして長く、逆さに垂れ下がる黒髪も艶やかで和風な被虐美をもり立てる。もちろんタイトスカートは捲れてしまい、純白のシルクショーツに包まれた股間は丸見えだ。

スカートからはみ出した白桃のようなお尻は出産によって丸々と熟れており、スレンダーでスポーティな聖実の中で、一際女らしさを強調していた。

「組長が出てくるまでに下ごしらえをしておきたいのでね。こずえ、やりなさい」

「はい、ご主人様。いきますよ、先輩！」

パッシーイイツ！

「うっ！」

手加減なしの鞭打ちが聖実の太腿に弾け、雪のように白い肌に真っ赤なミミズ腫れが刻み込まれる。乗馬鞭は短いながらも鉄芯が仕込まれており、扱いが簡単な割に強烈な一撃を放つことができるのだ。

「さすがですね。これくらいじゃ声も出さないなんて。それじゃあもつと激しくいつてみましょうっ」

パシッ！ ビシッ！ バシイイツ！ ピシャアアアアンツ！

今度はプリプリと張ったお尻に、集中攻撃を撃ち込む。苛烈な打撃は皮膚のみならず、皮下脂肪から筋肉を貫通して、骨盤にまで響く。激しい鞭を聖実は唇を真一文字に結んで堪え続けた。

「なんて魅力的で、セクシーで、いやらしいお尻なんでしょう。このムチムチのお尻でいつも男たちを誘惑しているんですね。特捜の男たちはみんな、このお尻を舐めるように視姦して、夜のオカズにしているんです。知ってましたか」

「くっ！ フンっ……私を惑わそうとしても無駄よ！ うっ……こんなもの、蚊が刺

したほども感じないわ」

ネチネチと囁くこずえに、余裕の笑みすら浮かべて切り返す。過酷な訓練を積んだ聖実は精神力で痛みをコントロールできるのだ。

「もつと、好きなだけ打てばいいわ。マッサージには丁度いいくらいよ」

「むっ、どうなつても知りませんよ」

パシッ！ ビシッ！ バシィイッ！ ピシヤアアアンツ！

ムキになったこずえが一層激しく鞭を振るう。たちまち臀丘は真っ赤に染まり、夥しい汗が噴き出す。それでも聖実は瞑想するように瞼を閉じ、平静を保ち続ける。

「ハア、ハア……どうです、剣崎先輩。素直になりましたか、ハアハア」

「はあ、ふうっ……フフン。あなたのほうがバテてるじゃない。私は対拷問の訓練を受けているのよ。いい加減諦めたらどうなの」

逆さのままこずえと阿川を睨む。実際にはかなりの苦痛であったが、それを表に出すほど柔ではない。強い意志を込めた切れ長の瞳の輝きはいささかも衰えていない。

「まあ、貴女ならそうでしょうね。そこでコイツの順番というわけです」

阿川は小型のガラス容器をポケットから取り出した。中には毒々しいピンク色のクリームが充填されている。

「それが『エンジェルボール』？……秘密とか謎とか偉そうなことを言って、結局

タダの薬じゃない」

「フフフ。ただの薬かどうか……鑑定は貴女自身の身体でお願いしますよ」
うそぶきつつ、容器をこずえに手渡す。

「こずえ、君の手で彼女の扉を開いてあげなさい。いかに優秀な捜査官でもエンジェルフォールでヤク漬けにされれば堕ちるしかないのですから」

「はいっ。ああ……私の手で先輩をヤク漬けに……ああ、夢みたい」

恍惚とした表情で薬を受け取り、聖実のショーツを横にずらす。赤く腫れた尻肉は巨大な完熟トマトを二つ並べたような量感が素晴らしく、若いこずえにはない魅力だ。その谷間の底に、セピア色の蕾が恥ずかしそうに縮こまっている。

「行きますよ、先輩。おクスリ初体験ですね」

「くうっ！」

尻タブに魔薬クリームを塗りつけられて、さすがの聖実も焦りを感じる。苦痛には耐える自信があるが薬物ではどうなるかわからない。しかも得体の知れない新型の覚醒剤なのだから、不安は募る。

「この薬は強力すぎるから、少しずつ慣らしていく必要があるんです。こうやって肌
に塗るだけでも十分吸収されるから、注射なんか使いませんし、痕もつかないんです
よ」

「ふん、勝手にすればいいわ」

鞭打たれたばかりの肌塗りに塗り込まれて、尻タブがサツと鳥肌立つ。おぞましさに腰を振りたいところだが、鎖で拘束されていてはそれもできない。

(うう……これがエンジェルフオール……)

ピリピリ染みる刺激はすぐさま灼けるような熱さ変わる。それはやがて何百匹という虫が這い回るようなむず痒さへと変化して、聖実のお尻全体を包み込んでジワジワと燃え広がっていく。それにつれて次第に動悸が激しくなり、呼吸も乱れてきた。気のせいか頭もぼーつとしてきて、こずえの声も洞窟内のようにエコーがかかって聞こえる。

(……何が起こっているの……?)

徐々に肉体に起こる異変。恐ろしい覚醒剤を塗布されてしまったという実感が、聖実を不安にさせる。

「ご気分はいかがですか？」

パッシィイインツ!

「あううっ！」

これまでと比較にならない衝撃をお尻に感じて、思わず声が出てしまう。

「ウフフ。やっとイイ声が聞けました。やっぱり先輩も私と同じ牝なんですね、嬉し

いですよ」

パシイイ——ッ！　ピシイイ——ッ！　バシイイ——ンッ！

力を入れるのではなく、手首のスナップを利かせて一定のテンポでリズムカルに打つ。肌は傷つけず、むしろ魔薬をより深く染み込ませるようなやり方だ。

「ソクッ！　はうっ！　くううっ！　あうっ！」

必死に堪えようとする聖実の唇から、徐々に悲鳴が搾り取られていく。しかしそれは痛みのせいだけではなかった。

(なに……これは……?)

身体の奥深くにまで届く衝撃が、覚醒剤クリームを塗布された双臀にピンピンに響く。そして熱い疼きが波紋のように、腰から全身へと広がっていくのだ。

「ううっ……こずえ……あうっ！　ハアッ……ハアッ……もうやめなさい……んくう……正気に戻るのよっ……くうっ！」

「フフフ。何を言っても無駄ですよ。なぜなら彼女の精神は正常なのですから」

嘲笑いつつ阿川も鞭を手にして正面に立つ。細長い带状の革が何本も合わさった、房鞭と呼ばれるタイプだ。乗馬鞭よりも肌表面にダメージを蓄積させるのにむいている。

「う、うそよ……クスリで……おかしくされているだけよ……っ！」

「おかしくなっているのはどっちですかねえ」

ボタンを飛ばしてシャツブラウスの胸元をビリビリと引き裂く。間髪を容れず白いブラジャーをずらし、双乳を露わにした。

「おお、これは見事だ」

「スゴイです先輩。サイズは88、Fカップはありそうですね」

「うう……」

二つの乳房が、霊峰を彷彿とさせるような優美な曲線を描いて盛り上がる。逆さ吊りのせいで顔のすぐ下にまで迫る迫力は圧巻だ。子供を一人育てただけあって、完熟の果肉は聖なる母性と淫なる魅惑を併せ持っている。授乳を終えた乳輪も乳首も濃いグミ色に成熟し、生娘にはない濃厚な女の味わいを醸し出していた。

その乳房の土台となる胸郭は鍛えられた筋肉が敷き詰められ、野性的な色気も兼ね備えている。

「ここにもクスリをあげましょう」

「くっ、汚い手で触らないで！ この変態！」

桃色クリームを左右の乳房全体にたっぷり塗りと塗り込んでくる阿川。柔らかさを試すように指を食い込ませ、乳房を自在に変形させる。五指を呑み込むほどの柔軟性を示しつつも、掌を押し返すような弾力も見せつける。まさに理想的な乳房だと言えるだ

ろう。

「授乳経験があると、乳腺がよく発達しますからね。素晴らしい揉み心地ですよ」
こずえがリークしたのだろう。聖実に関する情報は家族のことまで筒抜けだった。

「くっ、そんなことまで……」

魔葉クリームがローションのような効果を發揮して、乳肌が妖しくテカリ、乳首もまるで珊瑚細工のように輝き出す。

「元気のいい乳首ですね」

乳首の根元にゴム紐をキリキリと巻きつける阿川。

「こうされると、もっと敏感になるでしょう」

(うう……む、胸が……)

阿川の言うとおり、血行を阻害された乳頭の感度は跳ね上がり、ちよつと触れられただけで飛び上がるほどの激感を伝えてくる。さらにあの疼くようなむず痒さも数倍になって湧き起こり、聖実を苦しめた。

「フフフ。よく効くでしょう。それっ！」

デリケートな乳房に向けて、容赦なく鞭を叩きつける阿川。

パシッ！ パシッ！ パシッ！ パシッ！

「うああうっ！」

往復ビンタのように襲いかかる鞭に翻弄され、双乳が上下左右に跳ね躍る。

覚醒剤クリームの影響だろうか。乳肌はいつもより敏感になっており、痛みのあまり打たれるたびに網膜の裏で真つ赤な火花が散った。

「痛いですか、苦しいですか？ でも、それだけじゃないハズです。もつと深く感じなさい。ほら、身体が少しずつ熱くなつていませんか？」

バシンッ！ パシンッ！ バシッ！ パシィンッ！

「背徳的で魅力的で切ない……そしてとびきり淫らな何か……貴女の肉体の奥底で目覚めてきたのではありませんか？」

狙い澄ました鞭が縛められた乳頭を正確に弾く。そのたびにビーンビーンと痺れるような快美が、乳肉を貫いて心臓にまで震撼する。それはこれまでの訓練では体験したことのない感覚で、どう堪えればいいのかわからない。

「うう……そんなこと……あるわけないわ……ハアハア……あなた、頭がおかしいんじゃないの……ンああうっ！」

「ホラホラ、お尻も、お乳も……だんだん気持ちよくなつてきますよ……少しずつ少しずつ、先輩は変わっていくんです」

バシ——ンッ！ パシ——ンッ！ パシィ——ンッ！

こずえも意地悪く囁きながら、尻打ち刑を続行する。激しさを増す拷問に、黒髪の

捜査官は逆さ吊りの身体をくねらせ、手脚を突つ張らせた。

「うううっ……こずえ……ダメよ……ハア、ハア……あなたは捜査官……悪に屈してはいけないわ……くうっ！」

清楚で優しく聖実と同じくらい正義感が強かったこずえが、サディスティックな笑みを浮かべ、いかにも嬉しそうに鞭を振るっている。ここまで豹変してしまったことに戦慄を禁じ得ない。

前からも後ろからも絶え間なく撃ち込まれる打擲が、少しずつ聖実の肉体を蝕んでいく。いつしか全身の肌という肌から汗が噴き出し、美貌は湯上がりのようにピンク色に熟していた。

(ううう……私の身体に……何が起こっているの……)

痛みが消えたわけではない。だがその生き地獄のような痛苦の中に、得体の知れない疼きがほんのわずか混じり込む。それは痛みと同じ神経経路を辿りながら脳内に浸透し、聖実自身知らなかった脳中枢の奥を、羽毛のように撫でくすぐってきた。

「おや、乳首が立ってきましたよ。鞭で感じているんですか？」

「うああ……それは肌寒いからよっ……勘違いしないで……ううう」

「抗っても無駄。先輩は墮ちるの……淫らでいやらしい牝奴隷に……」

「私は負けない……ああ……何があっても絶対につ……あああうっ」



薬物と逆さ吊りで朦朧としてきた頭に阿川とこずえの声がかたまする。そんな言葉に誘発されたのか。悔しさや恥ずかしさ、惨めさといった感情を押しつけて、どす黒い情感が身体の奥深くでドロリと蠢いた。

(ああ……これは……なんなの……?)

痛みしか感じないはずの拷問だというのに、肉体は勝手にそれを別の『何か』に変換してしまう。その正体もわからないまま、聖実は惑乱の渦へと呑み込まれていく。

(だんだん……身体が……変に……これが……エンジンフル……?)

鞭が命中するたび、赤く染まった尻と乳の肌に汗の霧が弾け飛ぶ。苦しげに仰け反り、腰を振るたびバラバラに乱れた黒髪がカーテンのように翻る。太腿の内側が筋張って痙攣し、つま先が空中で丸まったり反り返ったりを繰り返した。

「苦しみ悶える貴女の姿、実に美しいですよ。それっ！」

バッシィイ——ンッ！

「ヒッ！」

阿川が鞭のふり方を変え、それまでの弾くような打擲から、ビタンと巻きつけるような叩き方に變化する。

放射状に広がる房鞭が、白い乳肌に見つ赤な手形のような痕を刻み込む。

打たれた瞬間の肌を引き剥がされるような激痛。過剰なまでの痛みの信号は脳内回

路を飽和させ、思考回路までもバラバラに寸断する。特に乳首を打たれた時の衝撃は凄まじく、頭の中が一瞬真っ白になり、意識が飛んでしまいそうになる。

「ほうら、こっちもいきますよ、先輩！」

虚ろになる聖実の意識を現実連れ戻すのが、背後からのこずえの鞭だった。

たちまち聖実の身体には無数の鞭痕が刻み込まれ、あたかも赤いロープが縄の上に乗ねられていくかのような、壮絶な被虐美を醸し出す。

「あっ……ああっ！ んくうっ……はぁぁ……あぁぁむっ！」

普通なら失神してもおかしくない過酷な責め。だが、聖実はその拷問を受け止めていた。いや、受け止めさせられていたというべきだろう。

(痛いのに……苦しいのに……)

何度も意識を切断されては再接続される。それを何度も何度も繰り返されるうち、聖実は白昼夢を見ていた。

それはほんの束の間の夢。無数の電気クラゲが漂う海中に放り込まれ、何百本という触手に巻きつかれる。触手はお尻や胸や太腿など、肌や粘膜の柔らかいところを狙って絡みつき潜り込み、毒針を突き立てた。激痛と痺れにのたうち回りながら、聖実は深い海の底に引きずり込まれていく……。

「ほら、失神なんてさせませんよっ！」

バシィィ——ンッ！

「きゃあああつ！」

その夢もお尻に炸裂した一撃で霧散した。もつとも全身をヒリヒリと襲う痛みは悪夢の中と変わりのない。

「はあ……はあ……も、もうやめなさい……こずえ……あううっ」

「先輩ったら、やめるとか言いながら、アソコが濡れているじゃないですか」

「う、うう……うそよっ……そんなことあるはずないわっ！」

「調べてみましょう。百聞は一見にしかずですよ」

阿川がナイフでショーツの両サイドをサッと切り裂いた。布きれと化した下着が剥がれ落ちると、熟れた人妻の花園が剥き出しにされてしまう。

「フッフ。やはり濡れていますね」

漆黒の密林に囲まれた蜜肉はしつとりと潤い、濃厚な女の芳香を漂わせていた。開脚させられているにもかかわらず、大陰唇は固く閉じ合わさって聖実の貞淑さを物語っているかのよう。それでも熟れを隠すことはできず、ムツチリ脂ののつた下腹部、太腿や尻肉が生み出す合成曲線は、芸術品と言ってもいいほどだ。

「ち、ちがうわ……そ、それは汗よっ」

夫にしか見せたことのない秘所をヤクザの男に視姦され、激烈な羞恥と屈辱が炎を

噴き上げる。普通の女なら泣き叫んでいるところだろうが、強い意志とプライドがそれを許さない。しかし凌辱者たちは女の弱点を熟知していた。

「そうかしら？ でもあま〜いオマ○コの匂いがプンプンしますよ」

こずえの指がラヴィアを左右に割り拡げた。クチュンと湿った音を立てて爆ぜた粘膜は鮮やかなサーモンピンク。透き通るような透明感のある秘肉が、蜜に濡れてキラキラ輝き、真珠のような牝芯もぷつくりと膨らんで発情の兆候を見せている。

「ほら、クリちゃんだつてこんなに」

その敏感な肉の芽を摘まんで、覚醒剤入りのクリームをグリグリと塗り込んできた。「うあああつ！ そんなところまで……つくうつ」

包皮を剥かれ、剥き出しになった牝芯に魔葉が浸透する。さすがに同性だけあつて女の泣き所を知り尽くしている指使いだ。

「もつともつと大きくしてください。ウフフ、喘いじゃつて。先輩かわいい」

「ヒッ！ そこはだめだつて……あああ……言つてるでしょつ！ あつ、ああつ……あむうん！」

腰を前後に揺すつても、魔道に堕ちた元捜査官の手からは逃れられない。揉み込まれ、扱かれて、クリトリスは小指の先ほどにまで勃起させられてしまう。

「ウフフ、仕上げはこうです」

サディスティックに歪めた唇をペロリと舐めて、そそり立った淫核の根元に赤い細いゴム紐をクルクルと巻きつけ始める。

「こうされると、もっと敏感になっちゃうんです。私もこれをされた時は泣いちゃいました」

「うあああ……だめ……くうううっ」

白い歯を噛み縛って刺激に堪える聖実。こずえの言うとおり、ゴム紐に括り出されたクリトリスから、苦痛と快美が入り混じったなんとも言えない切なさ、ツーンと断続的に撃ち込まれ、深く体内にまで浸透してくる。

「準備はできたようですね。覚悟はいいですか」

正面に立った阿川が鞭を上段に振り上げる。そのまま鞭を縦に振り下ろすつもりだ。当然狙いは――

パッシイイ

ンンッ！

「アキヤアアアアアアッツッ！」

もつとも鋭敏な女の弱点をピンポイントで鞭打たれ、たまらず絶叫が迸る。まるで雷にでも打たれたかのような、凄まじい衝撃に、目の前で火花が散った。

「ハハハッ。いいですよ、その声が聞きたかったんですよ。ソレソレッ」

パシイイッ！　ピシャアアアッ！　バシイインッ！

「アギイツ！ ヒイイツ！ ンアアアッ！ ハヒイインツ！」

繰り返し何度も何度も、正確無比の鞭が淫核を打ち撻る。

もちろん傷つけないように手加減はしているのだろうが、研ぎ澄まされた感覚神経が集中している箇所だ。格闘術で肉体を鍛えている聖実でも、そこは鍛えようがなく、逆さ吊りの身をくねるように躍らせるしかない。

(熱い……身体が……熱い……つ)

しかしそんな責め苦の中、聖実の肉体は信じられない反応を見せていた。

乳首も淫核もますます熱く硬く充血し、もっと打って欲しいと言わんばかり。クレヴァスの奥底では秘粘膜が、熱い滴りを滲ませているではないか。

「ああん。こんなにおマ○コグチョコグチョコにして。鞭だけで今にもイキそうじゃないですか、先輩！ でもまだですよ。もっと苦しんで、もっと啼いてからイってくださいます！」

バシッ！ バシッ！ バシッ！ バシッ！ バシッ！

背後からも昂奮状態のこずえが鞭の雨を降らせる。お尻や背中に、縦横無尽、無茶苦茶にミミズ腫れを刻み込んでいく。

(うそよ……私……どうなってしまったの……)

ありとあらゆる痛みや苦しみが、妖しい感覚へとすり替わる。

肉という肉が勝手に燃え、一度勢いがついた官能の炎は治まるところを知らず、燎原の火のように全身を焼き尽くそうとする。これまで味わったことのない、夫とのセックスとはまったく次元の異なる荒々しく激しいケダモノじみた感覚だ。

ビクンッビクンッと四肢に痙攣が走り、徐々に背中が反り返っていく。

「フフフ。これがエンジェルフォールの力です。どんな貞淑な人妻も、正義に燃える捜査官も、女である限りこの快楽からは逃れられないのですよ」

「ンあああ……違う……くあああ……私は……あなたたちの思い通りにはあ……あきやああああつ！」

打たれたクリトリスに灼熱感がカアッと広がり、それが冷める前に次の鞭が撃ち込まれる。次第に蓄積されていく淫熱で、身体がトロトロに溶かされてしまいう。

(ああ……これが……エンジェルフォール……?)

チカチカと脳内で星が瞬く。こみ上げてくるうちなる衝動を抑えきれず、聖実を顎をギクンと反らして瞳を大きく見開いた。桃色に染まった景色が、蜃気楼のようにぐにやりと溶けて現実感が希薄になる。

「ああ……ハアハア……く、くる……くるうっ……ああ……っ！」

不思議な無重力のような浮遊感に包まれたまま、聖実はワケも分からず腰を前後に揺り動かしていた。

「初めてなのに鞭だけで気をやるなんて、先輩だったらいつも真面目なふりをして、実はマゾツ気があったんですね」

「ククク。エンジェルフォールとの相性はよさそうですね。これなら意外と早く仕上がりますよ」

「いった……？ 私……鞭で……？ そんな……」

鞭打ちで絶頂させられてしまった事にショックを受ける。痛みですら快感に変える、それがエンジェルフォールの魔力だというのだろうか。恐ろしいほどの効果を体感させられて、動揺は隠せない。

「くう……こ、これくらいで……ハアハア……勝ったと……思わないことね……ハアハア……全然、たいしたこと……ないわよ……はあぁっ」

それでも気丈にも聖実は阿川を睨みつける。

（あなた……昭……私は負けないわ）

負け惜しみと言われようと、悪を憎む気持ち、そして家族への愛が彼女の精神を強く支えているのだ。

「ククク。さすがは特捜部トップの敏腕捜査官殿ですね。調教のし甲斐がありそうですよ」

メガネの奥の一重眼を光らせ阿川が不気味に嗤った。

「これ以上何をやる気なのっ？」

聖実 は分婉台のような革の椅子の上に浅く腰掛けた状態で拘束されていた。両手は頭の後ろでひとまとめに括られて、両腋を晒してしまふ恥ずかしいポーズ。さらに両脚は天井から伸びた鎖でV字型に吊り上げられている。

スーツは乱れて、乳房も聖域も丸見え。さらに乳首とクリトリスには、ゴム紐が巻きつけられたままだ。

「今までのほんの下調べですよ。今度は身体の内側から先輩をシャブ漬けにしてください」

点滴のような器具を看護師のようにテキパキと用意していくこずえ。

逆さになった瓶には得体の知れない桃色の液体が満たされ、そこから長いチューブが伸びている。きつと中身はエンジェルボールに違いない。

「少し早い気もしますが、貴女なら堪えられますよ」

チューブの先端を聖実の股間へと近づけてくる。先に針はなく、丸いノズルのような形状だ。

(うう……また……あのクスリを……使われるんだわ)

鞭打ちでアクメを味わわされた屈辱が蘇る。肌塗られただけであれほどの効果を

發揮したのだ。エンジェルフォールに対して脅威を感じずにはられない。

「ではいきますよ、劍崎先輩」

こずえのしなやかな指が尻タブをくつろげ、小さく窄まったアヌスを暴き出す。その放射状の皺の中心に、ノズルの先端を押し当てた。

「っ!! な、何をするのっ……そこは……」

てつきり性器を責められると思っていた聖実は一驚いて顔を跳ね上げる。

「エンジェルフォールは粘膜からの吸収がいいんですよ。一番はオマ○コに直接ですけど、それはまたあとのお楽しみです」

説明しながらノズルをズブリと押し込むこずえ。

慌ててお尻を締めつけても遅かった。細いノズルは括約筋の抵抗をすり抜けて、肛門内部へ達してしまう。冷たいノズルの感触はまるで氷柱つららを押し込まれたようで、おぞましさに背筋がサアツと鳥肌立った。

「さあ召し上がれ。ウフフフ」

嗜虐の昂奮に瞳を輝かせながら、こずえが薬瓶のコックを開いた。透明チューブの中を桃色の液体がス——ツと駆け下り、聖実の肛門に吸い込まれていく。ヒンヤリ冷たい液体に浸入されて、直腸粘膜が驚いたように蠢動した。

「うつくう……やめなさいこずえ！ うう、入れるな……入れるなあっ！」

腰を跳ね上げ、必死にお尻を振り立てる聖実。だがどんなに足掻いても、肛門を締めつけても、魔薬の侵入を止めることはできない。

「こんなのは序の口ですよ。濃度は一〇%、量も一〇〇C程度です。点滴のように少しずつ染み込ませてあげますからね」

阿川の言うとおり、逆さになった薬瓶からポタポタと一定の間隔で薬液が滴っているのが見えた。

「どんどんお尻に入っていきますよ先輩。高いおクスリなんですから、漏らしちゃダメですよ」

「あ、ああ……人前で、漏らすわけないでしょっ……くうっ」

「さすが先輩。安心してかき混ぜられますね」

小悪魔的な笑みを浮かべ、こずえが浣腸ノズルをゆっくり抜き差しし始めた。

「あっ、ああうっ！ それに触らないでっ！ くううっ！」

小指ほどの太さのチューブが滑らかに出たり入ったりを繰り返す。

深く挿入される時の息苦しさと、スツと抜かれる時の寂寥感とを交互に味わわされ、これまで感じたことのない未知の感覚が揺さぶられる。

（なんなの……これは……お尻が……こんな……）

早くもお尻の奥が、火がついたように熱い。その淫熱はすぐさま子宮に燃え移り、

女性器全体を火照らせ始める。まだ十分の一も注入されていないのに、恐ろしい効き目だ。

(つくう……お尻が……ああ……熱い……熱いわ……)

少しずつ愛液が滲み出し、媚肉全体がハチミツを塗ったようにヌラヌラ輝き出す。やはり肌に塗られた時とは、段違いの効果だ。

もちろんアナルでの性体験など皆無で、夫に触れられたことは一度もなかった。聖実にとつてアナル性交など異常者の変態行為であり、まったく無縁なモノだと思ってきた。そこを責められて反応してしまう自分の身体が信じられない。

「おお、これは激しい。どうやら捜査官殿はお尻が弱点のようですね」

「はあっはあっ……ちがう……そんなことないわ……」

「ご主人様の目は誤魔化せませんよ。ホラホラ、どうです」

こずえは面白がつてさらに抜き差しを加速させた。ノズルはシリコン製で、逆流防止の節がいくつかあり、使い方次第ではアナルパイプと変わらない。

「ンああああ……そ、そんな……はげし……はあはあ……だめ……あああんっ！」

一節一節に粘膜を擦られるたび、排泄した時の開放感とよく似た、原始的で動物的な心地よさが湧き起こる。生まれて初めての肛虐だというのに、自分でも驚くほど女っぽい喘ぎ声が出てしまう。そんな声は夫との性交でも、出したことはなかった。

「わあ、そんな可愛い声が出せるなんて。先輩、よっぽどお尻が気持ちいいんですね」
「ちがうと……言つて……いるでしょ……あああ……縛つて、薬で責めるなんて……
こんなの卑怯よ……うううあ……あん、ああんっ」

否定したくとも声の上擦るのを抑えきれない。容赦なく流れ込んでくる魔薬が、未知なる感覚を呼び覚ますのだろうか。

(こんな……こんなはずは……)

生真面目な聖実にとつて、肛門は単なる排泄器官でしかない。そこに性感が存在すること自体信じられなかった。

「気に入ってもらったところで、こずえ、印をつけてあげなさい」

「ハイ」

拘束台の下から取り出したのはカミソリとシェービングクリームだ。

「はあはあ、今度は一体何を……」

「先輩のアソコのヘアを剃るんです」

聖実の側面にこずえがポジションをとり、脅かすようにカミソリの刃を光らせる。股間の正面には阿川が立った。剃毛の様子をすべて見るつもりなのだろう。

「な……っ」

「赤ちゃんみたいなツルツルになれば、もう旦那さんには見せられないでしょ。つま

り先輩が日向組の所有物になりましたっていう印なんですよ」

「い、いやよ！ そんなこと許さないわ！」

「先輩の意見なんてなんの意味もないんですよ」

「きゃあっ！」

シュッとシエービングクリームの泡を股間に吹きつけられ、小さな悲鳴を上げる。鞭打ちで火照った肌には刺激が強く、ヒリヒリと染みだした。

「動くと危ないですよ、先輩。せつかく綺麗なオマ○コなんですから傷物にはしたくないんです」

「ああ……」

銀色のカミソリの刃を押し当てられ、身動きがとれなくなる。

聖実のヘアは薄めで恥丘の上にふんわりと若草のように生えている。泡で大半が隠れてしまう程度なので、あつという間に刈り取られてしまうだろう。

ジョリ……ジョリ……ジョリ……。

肌の上を鋭利な刃物が滑るたび、泡が削ぎ落とされ、白い肌が露出していく。

(うう……あなた……悔しいわ……)

大人の女としてこれほど屈辱的なことはない。プライドを大きく傷つけられて、悔し涙すら滲ませた。

そして数分後。

「はい。ヘアの処理は無事完了です。赤ちゃんみたいで可愛いですよ、先輩」
仕上げに蒸しタオルで全体を綺麗に清掃したこずえが、満足そうに嗤った。

「ほら、ちゃんと見てください、先輩」

「あ……ああ……っ」

スマホのカメラに映し出された自分の聖域を見せられて、思わず小さな悲鳴がこぼれた。

童女のようにツルツルの肉土手に、くつきりと走る縦割れのスジ。それでいて内側から滲み出る熟れた色気は隠しきれない。

出産経験まである大人の身体と、子供のような無毛のスリットの組み合わせはともアンバランスで、卑猥な感じがした。

「赤く充血して、発情しているのがわかるでしょ」

「ああ……」

さらにラヴィアが伸びきるほど左右に引つ張られ、サーモンピンクの粘膜までさらけ出される。溢れるほどの花蜜にまみれた媚肉の断層が何かを欲しがるようにヒクヒク蠢動し、ゴム紐に括られた淫核も、これ以上ないほど大きく勃起させられている。

まさに発情という言葉がびったりくる淫靡さだ。

(あんなに……濡れてしまうなんて……)

我が身の浅ましさにショックを受ける聖実。自分自身に裏切られたダメージは大きく、思わず顔を背けてしまう。

「先輩ったら、アソコの毛を剃られて感じちゃったんですか。ひよつとして露出狂の気があるのかしら。ウフフ」

「それともシャブ浣腸で感じているのかな。ククク」

「ち、ちがうわ……私はそんな女じゃないわ……っ！」

動揺を悟られまいと激しく首を横に振る。もつともそんな必死さは、感じていると白状しているようなものだった。

「フフフ。オマ○コを濡らしながら言っても説得力ありませんよ、先輩」

「浣腸も終わって、尻をこんなに蕩けさせているじゃないですか」

阿川はノズルをキュポンつと抜き取ると、すぐさま指をねじ込んできた。

ズブツ……クチュツ……ズブズブウツ！

「ひいっ！ 触らないで！ いやあああつ！」

自分でも触るのをためらわれる排泄器官を嬲られて、動転の悲鳴が噴き上がる。排泄専門の孔に異物を挿入される感覚は身の毛がよだつほどおぞましく、生理的に受け

入れがたい。ましてや今は浣腸直後だ。人前で漏らすまいと必死に括約筋を締めつけるのだが、それは男を喜ばせるだけだった。

「おお、この締まりのよさ……実に素晴らしい」

「う、ううっ！ 指を抜きなさい、この変態っ！ ハアハア……今すぐに、抜きなさいっ！」

アナル経験のない聖実 は血相を変えて首を左右に振りたくった。そんなところを性の対象にされるなど、まったく予想外でどう対応していいかわからない。

だが阿川に嬲られる肛門からは、奇妙な浮遊感と酩酊感が湧き起こって聖実を混乱させる。我知らずモジモジとお尻が揺れて、肛門がキュッと窄まっては、フツと緩んだりを繰り返した。やはりエンジェルフォールの魔手は聖実の肉体を侵蝕していたのだ。

「おお、また一段と締めつけが強くなりましたね。なんとという順応性の速さ。包み込む粘膜の柔軟性も一級品です。これは百人……いや数万人に一人の名器かも知れませぬ。きつと組長も満足されるでしょう」

阿川が抜き差しを繰り返しながら、同時にゆっくり円を描くように肛門粘膜をかき混ぜる。いやらしい手つきで触診し、聖実のアナルの性能を見極めていく。

「うぐうっ……め、名器だなんて……馬鹿馬鹿しい……ハアハア……そんなところを

褒められても……嬉しくないわ……ああっつ！」

ビクンビクンと吊られた太腿からつま先まで痙攣が走り、勝手に括約筋が収縮して男の指を食い締めてしまう。

「もつと素直になつてください。これほどいい尻をしているのですから、感じないはずがない」

阿川が叱責するように、肛門の中で指をカギ型に曲げて抉るように回転させた。

「うあああ~~~~~っ！」

きゅーんと切ない疼きに直腸を締めつけられ、聖実は白い喉を反らせて、甲高い悲鳴を上げてしまう。その拍子に膣孔から熱い蜜がとろっと滴るのが自分でもはつきりわかった。

(どうして……どうしてなの……)

防御の扉を一枚一枚こじ開けられ、新たな性癖に目覚めさせられていくような感覚。それが覚醒剤のせいなのか、自分の持つて生まれた身体のせいなのか。魔薬で混沌としてきた意識ではもう判別着かない。

「はあはあ……私は……感じてない……絶対に感じてないわ……あうう……い、いくら責めても……無駄なんだからあ……はああう」

弱点を敵に悟られまいと、強気に反論を続ける。しかし目尻がトロンと下がり、黒

瞳からはいつもの牝豹のような鋭い眼光は失われていく。まるで強いアルコールに酔わされているかのようで、いつものような気丈な態度を維持できない。

「ウフフ、口で否定しても無駄無駄。すぐくエッチな顔になってますよ、先輩。そう言えば鞭の時もお尻を打ったらアヌスが嬉しそうにピクピクしてましたね」

「こういうプライドの高い女性はお尻が弱点だったりするものです。フフフ、これほどのアナルを調教できるとは、私は運がいい」

もう一方の手で尻タブを揉んだり捏ねたりして、その感触を堪能する阿川。

聖実がアナルで感じるようになればなるほど、肛門から投与するエンジェルフォー ルとの親和性が高くなる。そうなれば聖実は魔薬浣腸なしでは生きられない身体になるのだ。

「肌の艶、きめ細かさ。皮下脂肪と筋肉の割合、そして出産経験による熟れ……どれをとつても申し分ないですよ。貴女なら最高のアナルマゾ奴隷になれる。きつと組長もお喜びになるでしょう」

「はあはあ……あうっ……ど、奴隷になんて、死んでもなるもんですか……な、何を馬鹿なこと……私が……お、お尻なんかで……ハアハア……感じるわけないわ……うんっ！」

「嘘はいけませんよ。前にはほとんど触っていないのに、すごい濡れようだ。このぶ

んならエンジェルフォールの虜になるのも時間の問題ですわね」

「はあ……はあ……ちがう……ちがう……あぁ……感じてない……ク、クスリなんかにい……ハアハア……負けるもんですか……あうううっ」

弱々しく首を横に振り続ける聖実。少量とは言え、やはり強力な魔薬だ。直腸粘膜から吸収された成分は確実に聖実の肉体を蝕んでいる。

身体が異様に熱かった。まるで高温のサウナに入られているかのような熱さで、桃色に染まった肌から夥しい汗が噴き出す。呼吸も苦しく、どんなに息を吸っても酸素が足りない気がした。

そして全身の神経も研ぎ澄まされ過敏になっている。ゴム紐で括られた乳首やクリトリスが、心拍に合わせてようにドクンドクンと疼き、それ自体脈打っているような錯覚に襲われた。素肌にわずかな空気の流れを感じただけで、無数の羽毛で撫でられているようなむず痒さに包まれる。

もし手が自由なら、今すぐにでも弄り回したいところだ。それに堪えているのは彼女の強靱な精神力ゆえだろう。

「シャブ浣腸されてもまだ理性が残っているとは、貴女が初めてですよ。さすがですね。でもそれも想定内です」

せせら笑いながら、阿川が浣腸の薬瓶を交換する。そしてノズルを再び聖実の菊蕾

ズブリと突き刺した。

「ンあああああつ！」

「今度は二〇%、量も三〇〇CCです。フフフ、どうですか？」

薬液が腸内に注がれ始めるとすぐに効果が現れた。

「うあ……あああ……卑怯者お……ああむ……」

ドクンッと腸内に広がる薬効を明確に感じ取ることができた。

上下の感覚がわからなくなるほどの浮遊感に包まれ、とても心地がいい。このまま何もかも忘れて、魔薬の快楽にのめり込みたくなる。

(ダメよ、聖実！ しっかりしなさい！)

「あ、あなたの思い通りに……私はならない……うう……魔薬なんて……ああ……魔薬なんて……全然効かないわ……はあはあ」

それでも聖実は必死に抵抗を続けた。濁流荒れ狂う河に流されそうになりながらも最後の一线で踏みとどまる。

「ククク。いいですよ、その表情。その凜々しい顔がどう変わっていくのか、とても楽しみです」

阿川はズボンを下ろすと、男根を握り出した。

平均サイズを超えるペニスは使い込まれた鉛色で、臍まで反り返る勢いで勃起して

いる。肉の傘は大きく張り出し、いかにも硬そうな胴部に浮き上がった血管の太さが、精力の強さを物語っているようだ。

「うう……犯すつもりなの……はあはあ……」

夫のものを遥かに超える逞しさを見せつけられて、汗濡れた頬を強張らせる。凌辱されることはある程度覚悟していたが、実際に肉棒を見せつけられるとやはり恐怖がこみ上げてくる。

「今すぐ犯してみたいところですが、焦りは禁物。最高のアナル奴隷に育てるには時間をかけないといけません」

いやらしい目で聖実のアヌスを見つめる阿川。薄ら嗤いながらペニスに塗りつけているのは、覚醒剤クリームである。肉棒はヌラヌラと妖しく輝き、猛毒キノコのように凶暴さをさらに増していく。

「そろそろ次の段階に進みましょう。さあ、口を開けなさい」

「い、いやよ……はあはあ……そ、そんなもの近づけないで……」

阿川の意図を察して、断固拒絶する聖実。好きでもない男のペニスを口にするなど、死にも勝る屈辱だ。しかも恐るべきエンジェルフォルまで塗られているのだから、嫌悪感が気が狂いそうになる。

「や、やめなさいっ……ハアハア……そんなこと……絶対に許さないんだから……私

には……夫が……夫がいるのよ……ハアハア……」

ハアハアと喘ぎながら、ユラユラと顔を横に振る。本人は激しく抗っているつもりでも、その動きは緩慢で弱々しい。

「ククク。そんな無意味な良識は捨てなさい。欲望を解き放つのですよ」
有無を言わせぬ勢いで阿川の剛棒が唇にねじ込まれる。

「んぐぐぐっ！」

（囁みついて……）

なんとか抵抗しようと思うのだが、すでに全身の筋肉が弛緩しており、歯を立てることもできなかつた。

「さあ、味わいなさい」

「んむっ……ふくうっ……ひゃめ……んんむっ」

舌を巻き込んでさらに深く侵入した亀頭が口腔を占拠する。

噎せ返るような牡臭がツーンと鼻を突き、続いて魔薬の甘い味覚が口中に広がった。
（ああああ……だめえ……クスリが……口に……）

ガツンとハンマーで殴られたような衝撃が脳天にまで突き抜ける。理性や矜持とともに脳までドロドロに溶かされて、頭の中がカラッポにされていくようだ。

「ご主人様のシャブオチンポ素敵でしょう、すぐに大好きになりますよ」

いつの間にか、股間にペニスバンドを装着したこずえが、妖艶な笑みを浮かべながら迫ってきた。

「んんっ！ むううんっ！」

突き出た桃色の張り形はあちこちに無数のシリコンのイボが生えており、さらに付け根にはクリトリスも同時に責められる突起が突き出している。

「これにはおクスリは使っていないですから、安心して楽しんでくださいね」

言うが早いのか、こずえは淫具をヴァギナに突き立ててきた。シャブ浣腸で濡れ、ほぐれてしまった膣孔は、侵入を防ぐことができない。

「あひうっ！ ひやめ……だめえ！ ンあああああっ！」

不気味な責め具を容赦なくズブズブと埋め込まれ、レズビアンの背徳感に聖実は思わずペニスを吐き出し、おとがいを突き上げて悲鳴を上げる。

「さぼるんじゃありませんよ」

すぐさま長い黒髪を引き抜かれて、口淫奉仕を強要される。無理矢理頭を前後に動かされ、喉の奥まで突きまкруられて、聖実は目を白黒させた。

「んっ……むっ……うぐぐ……むううんっ」

「これ一番細いのに、大袈裟ですね。そんなんじゃ、立派な奴隷になれませんか」

まるで感覚が繋がっているかのように昂奮しながら、こずえは腰をくねらせ、淫具

を沈めてくる。

ジュブツ……ジュブツ……ズブズブズブウツ!

「うううあ……あああ……らめ……私たち、女同士なのに……んぐうつ」

どんなに叫んでも足掻いても、撃ち込まれてくる淫杭からは逃れられない。薬で無理矢理発情状態にされた膣粘膜を押し広げられ、深く抉られて、異様な感覚がズーンと身体の奥底にまで響いてくる。

(あああ……お腹があ……)

薬液の量が多いせいとか、張り形で刺激を受けたせいとか、便意が急速に下腹に膨れ上がってきた。さらにグルグルと不気味な鳴動が不安を煽る。

「はあああ、全部入りました。聖実先輩のオマ○コを犯せるなんて……あああん……幸せ」

根元までぶち込まれると、今度は付け根の上部にある突起が淫核をグリグリと刺激してきた。ゴム紐で縛られたクリトリスは恐ろしいほど敏感になっており、ちよつと触られただけで、頭が真っ白になるほどの快感が突き抜けた。

「んぐぐぐぐつ……そこおひやめ……あああ……お腹があ……むふつ、あふつ……抜いて……くるし……くうんっ」

「フフフ。ヘアを剃ったからクリちゃんによく当たるでしょ。ほらほら、よがってば

「そうですか？ こっちはしつかりくわえ込んだまま放してくれませんか」

こずえは細い腰をくねらせながら、男も顔負けの巧みなピストンを撃ち込んでくる。じゅぶつ……ウイインツ……ズブズブズブツ……ウイイイインツ！

深く激しく抜き差しされるたび、子宮が押し上げられ、攪拌される蜜孔から濃厚な愛蜜がドロドロと溢れ出す。便意に戦慄^{わなな}く腸管にもピンピンと響いて、今にも漏らしてしまいそうだ。

(うああ……ダ、ダメよ……漏らすなんて……っ)

悪党の目の前で失禁するなど、それが魔薬のせいでも捜査官のプライドが許さない。聖実^{せいじつ}は肛門括約筋を必死に締めつけて決壊を防ごうとする。

「元捜査官の仲間に犯されるのはどんな気分です？ クハハハッ」

美人捜査官同士の濃厚なレスプレイを観賞しながら、聖実の頭をガクガク揺さぶるようにしてイラマチオを強要する阿川。突き込みはかなり過激で肉棒のほとんどが聖実の口内に没しようとしていた。

(ああ……く、くやしい……)

夫にすらほとんどフェラチオをしたことがない聖実にとつて、息が詰まるような汚辱の苦行だった。普通ならえずくか、嘔吐しているだろう。

しかしここでも魔薬の効果は絶大だった。亀頭部が深く埋まってくるにつれて、頭

がぼーっとし、苦しさが薄紙を剥がすように消えていく。それどころか、心地よい高揚感すら口内に感じてしまうのだ。

「効いてきましたね」

頃合いを見た阿川が剛棒を捻りながら、ゆっくりと深く深く挿入してくる。

「ん……んぶっ……むふっ……はあ、はあっ……あむうんっ」

前後の往復運動も次第にスムーズになり、苦しげに紅潮していた頬にも、どこかウツトリとした恍惚が浮かび始める。

捜査官として乗り込んできた時の颯爽とした雰囲気はどこへやら。イラマチオに喘ぐ悩ましい表情は、娼婦と変わらない淫靡さだ。

「ウフフ。シャブチンポの味が気に入ったみたいですね、先輩」

スレンダーな腰を舞うように振り、ズンズンと律動を打ち込むこずえ。同性だけに、膣孔の入り口や、粒だった天井、子宮口の周囲など、女が感じる急所を的確に責めてくる。

「んぐぐう……ぷはあ……そんなもの……んむっ……お腹が……ああ……も、もうおトイレに……おトイレに行かせて……ああむっ！」

官能と便意がドロドロに混ざり合いながらリンクして、一つの大きなうねりと化す。異なる二つの欲求は、燃え盛りながらその極限を目指して暴走していく。

「感じてるって認めたら、行かせてあげますよ」

「んむうつ……あふつ……か、感じてない……ンはああ……私は……感じてないわあ……むくつ……あうらん」

口では否定しつつも、ネットリと淫棒に舌を絡ませながら、顔が下腹に接するほど深く勃起ペニスを呑み込んでいく。V字に吊られた腰もヒョコヒョコと動いて、こずえとリズムを合わせていた。まるで一本の野太い杭で口から股間まで串刺しにされているかのような過酷な同時責めだ。

(いや……こんなこと……いやなのに……)

呼吸もままならず、今にも意識が途切れてしまいそうだが、肛門に休むことなく送り込まれ続ける覚醒剤浣腸による便意が、失神すらも許さない。

(ああ……身体が……おかしくなっちゃう……)

心と身体は引き裂かれ、惨めな強制奉仕にのめり込んでいく聖実。

長大な逸物に犯される唇や舌や喉奥から異様な陶酔が湧き起こり、フェラチオへの嫌悪感はもうほとんど消えていた。

レズ用ディルドウで突き扱られる子宮がふやけるほど濡れそぼち、媚肉は夥しい果汁を湧かせてクチュクチュといやらしい水音を奏で出す。さらに肛門にドクツドクツと注入されるシャブ浣腸が、狂おしいほどの便意を呼び、被虐の剛火をあおり立てる

のだ。

「強情な捜査官殿だ。じゃあ私を射精させたら、トイレに行かせてあげましょう」

「はあむ……んふっ……んぐっ……く、悔しい……むふっ……ああ……早く終わって……ンあぁ……あぁううん」

いやいやと首を横に振りながらも、タコのように唇を突き出し、小鼻を大きく膨らませたフェラ顔を晒す聖実。気がつけば剛棒はすべて口腔に没していた。

「んむっ……ちゅっ……ちゅば……はぁぁ……むふうん」

(あなた……昭……)

家族のことを思い、理性を保とうとしても無駄だった。三つの孔から、多幸感にも似た愉悦が湧き起こり、互いに増幅し合いながらさざ波のように全身に広がっていく。それが幻覚作用による偽りの多幸感だとわかっている。燃える血肉を鎮められない。乳首もクリトリスも痛いほど勃起し、張り形でレズ調教を受けさせられる蜜壺からは、濃厚な本気汁がとめどなく溢れ出している。失禁の恐怖に喘ぐアヌスもヒクつきながら、まるで薬液を吸い込むようにチューブを食い締めていた。

普段の良妻賢母からは想像もつかないような乱れっぷりである。

「もうディープスロートをマスターしましたね。この唇の感触、素晴らしいですよ。初めてとは思えません」

これまで多くの女を調教してきた阿川だったが、聖実の奴隷としての成長の早さに舌を巻く思いだ。吸いつくような頬の内側の粘膜。無意識のうちに男の急所をくすぐる舌。勃起を引っこ抜かんばかりの吸引力。どれをとっても一級品だった。

「持つて生まれた奴隷の素質というヤツですか。ククク、この先一体どんな花を咲かせるのか楽しみですね」

猛々しく、強く、美しい正義の女捜査官の肉体に、淫らなマゾ奴隷の素質が潜んでいる……。そのギャップが阿川を興奮させ、イラマチオの快楽を何倍にも増幅させた。肉棒の中を心地よい痺れが何度も走り抜け、精巢をビリビリ痺れさせた。

「はああつ、そろそろです。こぼさずに全部飲みなさいっ」

ズブッ！ ジュブッ！ ズブブッ！ グチュンッ！

黒髪をつかんで頭を固定し、腔肉を犯すような激しきでピストンさせる阿川。

「ほらほら、もっと吸って。ご主人様を気持ちよくさせるんです」

「ンンっ……んむっ……いひゃあっ……ううっ……むっ……んぐうんっ」

（お口に出されるなんて……死んでもいやあ……！）

夫の精液すら口で受け止めたことはないのに、こんなヤクザな男のザーメンを飲みされるなんて、発狂しそうな屈辱だ。しかし荒れ狂う便意に急かされて、こずえの命令どおり頬を窄めたバキュームまで披露してしまう。

その吸引に誘われ、肉棒が胃に届かんばかりの勢いで食道を犯す。喉までもがポツコリ膨らみ、縛られた手脚が突つ張つて断末魔の痙攣を走らせた。

「はあっはあっ、イってもいいんですよ、先輩。うんと、いやらしいアクメ顔を私に見せてくださいね」

情念を人造ペニスに送り込み、種馬のような激しさで腰を跳ねさせるこずえ。さらに電動バイブレーションも一段と強くなり、Gスポットとクリトリスを挟み込むようにして、痺れさせた。

「ヴィイイインッ！ ジュブブッ！ ヴィイイインッ！ ズブズブズブ！」

「んむうう……むううああああああんっつ」

充血して紅く肥厚した陰唇がプルプル震え、愛液の飛沫が飛び散る。張り形の振動は薄膜を隔てて肛門のノズルにも伝わり、シャブ浣腸に爛れた直腸粘膜に破滅的な刺激を与えた。堪えきれない衝動に突き上げられ、背中がアーチ状にググッと反り返っていく。

「おおっ、すごいっ……吸い込まれそうだ！」

アクメ寸前の緊張が喉にも伝わり、まるで性器のように肉棒に吸いついた。陰囊まで蕩けそうな心地よさに、さすがの阿川もこれ以上堪えるのは困難だ。

（ああ……もう、漏れちゃう……だめ、だめえ……っ）

全身が魔悦の鬼火に包まれ、血も肉も、骨までもドロドロに溶かされていく。喉の奥で膨らんだ亀頭がピクピク痙攣し、射精の予兆を告げるのを感じて、絶望と同期した異様な昂奮が脳髓を灼き尽くした。

「そおらッ！ くらいなさいっ」

根元まで押し込んだ淫棒をさらに深くねじ込む。まるで媚肉のような熱い粘膜に包まれて、阿川は渾身の射精を解き放った。

ドブドブドブッ！ ドビュルルルウウウッ！

「んむぐうう~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~つっ!!」

嘔吐感すら押し返して、大量の白濁流が喉に雪崩^{なだ}れ込む。溶けた鉛を流し込まれるような灼熱感が、聖実の身体を稲妻のように貫き、心臓に突き刺さった。

呑み込みきれなかったザーメンが逆流して鼻腔から溢れ出し、聖実は窒息寸前のイキ地獄の中のたうち回った。

「んぐっ……ごくっ……ごきゅっ……ぷはぁ……けほっ、けほっ……はぁぁ」

「アハハ、ザーメンまみれでいい気味です！ ほら、こぼさないで全部飲みなさい！ 飲みながらイっちゃいなさいよっ！」

憧れだった先輩捜査官を蹂躪する快感に酔いしれたこずえが、子宮の底にズンツとディルドウの先端を食い込ませる。これまで感じたことのない蜜楽の紫電が、Gスポ

ツトと淫核から脳天に強烈に突き抜けた。脳内回路がショートし、網膜の裏に無数の火花が散る。焦点を失った瞳が虚空を彷徨う。

「ンああっ……イクッ！ ああああっ！ イククウ~~~~ッ！」

肉棒を吐き出した白濁まみれの美貌が、汗を光らせてギクンと伸び上がる。吊られた両脚がガニ股に強張って腰が浮き上がり、収縮したアヌスから浣腸のノズルがズボンと飛び出した。

プシャアアアアアアアアッ！

「ヒッ……ヒイ——ッ！」

緋色の肛門粘膜を捲り返らせ、桃色の薬液がドツと噴出する。

堪えに堪えたぶん放出の勢いは激しい。魔薬液に肛門の内側を洗い流されるといふ異様な刺激と、排泄というもつとも動物的な快美とが融け合って、これまで味わったことのない途方もない開放感を呼び起こした。肛門を中心にして華が開花するように、肉体が捲れ返ってしまいうさだ。

「んああああっ！ 見るな……見ないでえ……はあああ……イクッ！ イクウッ！」

もうどこでイっているのかもわからず、最後に喉を搾るようにして甲高い悲鳴を漏らした後、聖実は全身を投げ出すようにして、拘束台の上にガクンツと横たわった。最後の一滴まで力を搾り取られた姿は、あたかも快楽の海で溺れた哀れな人魚のよう

だ。

「すごい。聖実先輩、失禁でイっちゃったんでしょうか」

「さすがにまだ、そこまではいってないでしょう。ですが、これだけいい尻をしているのだから、いずれはそうなるでしょうね」

「先輩が浣腸なしでは生きられないアナルマゾ奴隷に……ああん、とつても楽しみですよ」

ディルドウを突き刺したまま、こずえが聖実の汗まみれの頬を愛おしげに舐める。「う、うう……」

これから待ち受ける過酷な運命も知らず、聖実はドロドロした肉悦の波の中を漂い続けるのだった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>